ガイアシンフォニー

地球交響曲第七番 監督 龍村仁 インタビュー

平成22年7月24日(土)奄美パークイベント広場にて映画「地球交響曲第七番」の無料上映会が催されました。「地球交響曲」はイギリスの生物物理学者ジェームズ・ラブロック博士の唱えるガイア理論「地球はそれ自体がひとつの生命体である」という考え方に基づき、地球と調和し生きる人々を取材したドキュメンタリー映画シリーズです。1992年の「第一番」公開以来、全国各地で草の根の自主上映会が開催され、七作目を迎えるムーブメントでもあります。2010年夏公開の「第七番」では2009年に奄美大島で撮影した皆既日食の映像も織り込まれています。監督の龍村仁さんにお話を伺いました。

奄美パーク以下Ａ：監督の映画の撮り方は、こういうものを撮ろうと先に決めず、その場の状況で出会ったもの感じたものを展開しながら作っていかれるそうですね。ドキュメンタリーですが、「こんな風に見せよう」という感じがなくて、とても自然な、ライブな感覚があります。それを観た人達が自分たちの体験のように感じて、観る人それぞれの感覚を触発してくれる映画だなと感じました。

龍村仁監督以下Ｔ：だけど、それが俺にとって困難の始まりでもある。ある程度見通しを立てて作ったほうがいいのだけど、撮影のその場で自然発生的に出てきたものを定着させるから、社会的な意味ではいろんな困難もありますけども。たぶん、この映画が持続している理由は、俺の力ではなくて、そういう在りようを、ぎりぎりまで追求していくと、そこでお出会いした皆さんが、自分のことのように感じて、映画のために直接動いてくださるからだと思う。監督が非常に珍しい事を知っていてメッセージを伝えているっていう構造に見えますが、本当はガイアに出てくるのは、人間なら本来誰でも皆が知っていること。奥で。自分が知っていることなんだけど、知っているということを忘れていることなんです。深い部分で知っていたけれども意識化されていなかったものが映画を観ることで顕れてくる。映画の出演者の行動を見て、その人が行動を通じて言わんとしていることを「あれ、この人が言ってる事は、ひょっとしたら私が普段日常生活の中で感じていたことじゃないか」とお気付きになったときに、観客の方がそれを人とシェアしたくなるのだろうと思う。分かち合いのエネルギーですね。それが、自主的な上映会がこれだけ続いて２４０万人もの人が観てくださっている現実につながっている。

Ａ：先ほど監督がおっしゃった、実は皆が始めから知っているというお話ですが、それは体が知っているのではないかと思います。特に今回の第七番は冒険者、アスリート、医者を取り上げていて身体というものを強く意識させられました。

Ｔ：叡智というと、皆頭のことだと思うけれど、「全身体性の叡智」というものがあります。これはもう個のものではなくて、どんな生命体も全身体性の叡智を持っている。だけど人間は、なかなかその全身体性の叡智が開くということがない。特に都市文明の中で生きていると難しいです。その全身体性の叡智というのは、宇宙や地球とつながっていて「生きていると同時に生かされている」という体感に結びついている。これは言葉で教えることではないでしょう。言葉で知ったところで、ただの概念。ところが、こういう島に居て、ある日砂浜を歩いていると、ある一瞬に、すうっと感動が起こって、波の動きなんかを見て心が動いて「これ凄いことかもしれない」と思ったりする。それが全身体性の叡智です。それをいつでも蘇らせるチャンスを持っていないと、多分、人類という種は、とんでもないことをやらかすか病気になる。

Ａ：奄美のユタの教えにも、「自然から離されてしまわないように」という言葉があります。困難な時代の中で、これから人類が生き残っていくためには、自然からものを感じる、そういう元々持っている感覚を取り戻すことが必要ですね。

Ｔ：詩人の谷川俊太郎さんがこの映画について書いてくれた言葉が、正にそれでしたね。身体性の回路を通して、霊性、すなわちスピリチュアリティ、「大きなものにつながって生かされている」という体感に近づこうとしている三人を描いている、というように解説を書いてくれたんですけれども。やっぱり詩人だから、ちゃんと表現してくださるなあと思いました。

Ａ：取材対象の人物はどのようにして探していらっしゃるんですか。

Ｔ：結論だけ言うと「ご縁と、直感」です。ご縁と直感で、

情報と知識の収集による分析からではありません。直感というのは、出会った瞬間に分かるんですよね。「分かち合いましょう」というエネルギーで話しているか、「お前たちの知らないことを教えてやろう」っていうエネルギーなのか、一見「皆のために」って言いながら自分の名声のことを考えて言ってるか、みたいなことが。これはどういう回路で分かるのかっていうと、亡くなった、理化学研究所の、松本元という脳神経科学の最高峰の方が教えてくれたことがあってね。人間がものを感じたり考えるときに、脳の中で最初に出来た古い動物的な部分が新皮質と一緒に動いている訳で、実は、古い脳のほうが情報処理のスピードが速いんだって。それは生き延びるためなんですよ。他の生物の気配を感じた瞬間、あるいは風が吹いてきたときに、その中に何があるのか、いろいろな情報を感じ取る力。危険なのか安全なのか。そういう回路は、情報処理が速いほうが生き延びる力になるから。「この人はいい人そうだ」とか「敵対する可能性がある」とかは瞬時に判断している。その後に新皮質的な理解が来る。「あっこの人素敵だな」と思った瞬間から、その人の話は聞けるけど、「この人はちょっと怖いな」とか「この人はちょっと何かあるな」とか嫌なことを思ったら駄目。知るより前に好きになるほうが先だ、っていうことがある。実は映画の最大の特徴はそこにあって、映像を見て「この人いい人だから話聞いてみよう」と古い脳の部分での受け入れが出来て、それから聞くと、ある程度難しい話をされても聞けてしまうそれができるのが映画で、雰囲気っていうのが直接伝えられる。そこが活字の文学とはちょっと違う。もうちょっと、生身の、全身体性の中で聞いていくというか。それは音楽も一緒だけれど。どうやって出演者と出会ったのかという話に戻ると、客観的な確率から言うとあり得ないような出会い方をして、ご縁が生じちゃうことがあるわけです。それはもう、ご縁は、ありがとうございますしか、ないじゃないですか。だから、申し上げたように、最初の段階では、ご縁と直感。で、そこから、知識と情報をちゃんとやる、ということでないと、出来ない。やっぱり、物理学者と会って話すのに、物理学の用語がちんぷんかんぷんじゃ、ならないわけで、「この人素敵だな」と思ったときに、量子力学的な表現の中でこれはどういうのかだとか、ワイルなんかの言う考え方は、福岡伸一さんが書いて、ベストセラーになった、動的平衡のことなんですよね。だから、動的平衡ダイナミック・イクイリブリアムなんて舌を噛みそうな単語も、発音できるようになる、とかね。それをちゃんと、勉強するわけ。こんな七十になっても、好奇心と、どうしても会話をしたいという思いがあると、覚えるんだよね。今はもう、インタビューは通訳無しで全部自分でやる。

Ａ：今回の第七番では、皆既日食の映像が象徴的に使用されています。撮影地にここ奄美大島を選ばれた理由は。

Ｔ：これも結論から言うと、導かれましたとしか言えない。それだけいうと、宗教がかってると思われちゃうから、現実的な話もすると、一つには、ワイルが若いときにフィールドワークの最中に皆既日食に出会って「太陽と月の結婚」という本を書いていて、陰と陽とか、太陽と月とか、男性性の思考と女性性の思考との調和というワイルの思想を描く上で、皆既日食はひとつのキービジュアルになるなというのがありました。もう一つが、皆既日食のちょうど一年前の２００８年７月２２日に、２０年前からのお付き合いがある天河神社で、６０年に一回しかご開帳しないという掟のある、日輪天照大弁財天像というのがあって、次に開けるのは、後３０年後だったらしいんだけれど、宮司が、何故か分からないけれど、その７月２２日の大祭のときにそれを開けた。神の像というと、穏やかなものを想像してしまうんだけど、それは、

写真提供：龍村仁事務所

かなりプリミティブな、地母神という感じの像でした。そしてその像は、実は太陽と月のエネルギーを合体した力を持っているということを後で伺ったのでした。その像からあるインスピレーションを得て、ワイルのことも思ったときに、絶対皆既日食を撮ろう、と思った。それが皆既日食の一年前。皆既日食が見れて、ある程度の広さがあって、撮影のための宿とか車とか食事だとかも得られそうだし、直感的に奄美だと思った。で、奄美に行こうとしたら、宿とか撮影場所はあっても、飛行機や車が無い。それが、飛行機の急なキャンセルが出たり、様々の偶然によってここへ来ることが出来た。来てしまってから、なぜ奄美なんだろう、と思うわけです。偶然の重なりの中で、実現した。それを「呼ばれた」と言っているんです。そして、呼ばれた意味は何なのか、ということを考えざるを得なくなる。それで奄美のことを少しずつ知っていくと、奄美は、現代的な文明と、古代から自然の中で培ってきた叡智と、この二つのバランスが絶妙で、すごい重要なポジションにある島だと感じた。２１世紀のガイアと人類とが調和していくための大切な宝物のような何かが、ここにあると感じた。

Ａ：近代的なものと、古代から続く深い根をもった精神性とのバランスが、上手にしかも自然にとれているのが、奄美の暮らしだと思います。

Ｔ：どっちかが強すぎちゃう、っていうのはよくあるんだけど、バランスがとれている。琉球王朝や薩摩からの支配を受け、苦難の時代を経ながらも、人間が古代からの叡智を守ってきた。ある意味バランスをとらざるを得ない位置にあったおかげで、それが今につながっている。俺達が皆既日食を撮ろうとした時に、奄美には飛行機も車もある。一方では、いろんなお祭りがあったり、リゾート施設の中に神道があってそこだけは壊しちゃいけないって守られていたりする。そういうバランスが、奄美は取れている場所。それが人の雰囲気にも顕れている。撮影をしていた集落には宿が無かったけど、ありがたいことに、公民館に泊まらせていただけて、なおかつ集落の人たちが歓迎の八月踊りを皆で公民館でやってくださったり。鶏飯も美味しいのを皆さんで作ってくださって、公民館で一緒に食べたりして。そういう心が生きていながら、衛星通信でいろんなプラネタリウムに日食の映像を中継するなんていう、ハイテクなんかもできてしまう。宝物の中に居るとそれに気づけないのが人間ですが、そこに気づいたときに、やるべき事がたくさん見えてくると思う。経済的な循環というのも、もちろん大切。経済も勝ち負けだけで行くと大変なことになるけれども、経済だってある種の循環ですから。うまい循環がとれれば、皆にとって、とてもよい経済的進化の可能性もある。成長というより進化というか。要するに、バランスをとるということです。そういう意味で奄美は、地球的規模の価値の発信ができる宝物の芽がある場所だと思う。それは、先ずは奄美に居る人たちが気づいて、行動する責任があるんだろうなと思います。誰が仕掛けたのか分からないが、この位置に奄美があり、そこで生きた人々の歴史の中に、その宝物は体感として生きていると思う。それはすばらしいことなんですよ。（２０１０年７月２４日）

「地球交響曲第七番」
出演：アンドルー・ワイル（統合医療医学博士）/グレッグ・レモン（ツールド・フランス覇者）/
高野　孝子（環境教育活動家）
監督・脚本：龍村　仁
撮影：赤平　勉
プロデューサー：龍村　ゆかり
企画制作・配給：
有限会社龍村仁事務所
http://www.gaiasymphony.com/

奄美群島

特産品誕生STORY

第一回
沖永良部島「えらぶユリ」

「花と鍾乳洞の島」として知られる、沖永良部島。なかでもユリは、沖永良部島の特産品「えらぶユリ」として海外へも輸出された歴史をもち、テッポウユリが和泊町の町花とされるなど、花の島・沖永良部を代表する存在です。今回は、その誕生の背景にある物語をご紹介します。

沖永良部島でユリの栽培が始まったのは、明治時代のことです。沖永良部島でのユリ栽培取引の創始者、市来崎甚兵衛（いちきざきじんべえ）は鹿児島に生まれ、帆船で黒砂糖や雑貨などを輸送する商いをしていましたが、晩年に沖永良部島へ移り住み、雑貨商を始めました。島の開拓と繁栄に心を砕いていた市来崎は、山野に自生していたユリを栽培し島外へ販売することで、島に新たな産業を興そうと考えました。明治３２年にユリの栽培を始めた市来崎は、明治35年より横浜百番館のアイザック・バンティングと取引を始めます。これが、沖永良部島におけるユリ栽培取引の始まりです。

アイザック・バンティングはイギリスのコルチェスターにて、父親の代から商業を営む家に生まれました。バンティングは明治7年23歳で日本に渡り、やがて横浜市山手百番地に営業所「百番館」を開設、明治35年に市来崎を通じて沖永良部島のユリの買い付けを始めました。当時、欧米諸国では、キリスト教徒はクリスマスやイースターに白ユリを飾るほか祭礼や葬儀、切花や庭園などに四季を通じて一般に利用されており、日本産の美しいユリには需要があったのです。

経営者であると同時に熱心な植物研究家でもあったバンティングは、取引に度々来島し、島民にユリの収集や栽培法などを繰り返し指導し、島のユリ産業の向上に貢献しました。その熱心さに、業界でも一目置かれていたということです。出荷されたユリ根は船で輸送されましたが、長い船旅の間に傷んでしまうことがありました。これを防ぐ方法として、箱詰めの際、さとうきびの枯葉を充填物として包装する方法もバンティングが考案しました。島内にある自然物を利用してユリ根を保護できるこの方法は、現在でも大変重宝されています。

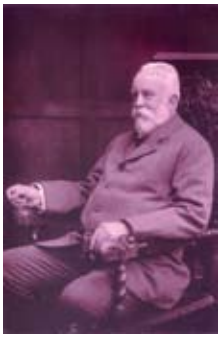
両者の始めたユリ栽培はやがて沖永良部全島に広まり、島の大切な産業へと発展していきます。ユリの需要が高まり、一時は沖縄芝居やサーカスが来島するなど島がにぎわいユリ景気に沸いた時期もありましたが、二度の大戦によってユリの出荷が止められてしまったり、太平洋戦争の戦時下、ユリ栽培は国賊・スパイの扱いを受け弾圧されるという厳しい時代を経験します。しかし、心ある人々によって種ユリが密かに守られ、戦後にユリ栽培を復活させることができました。その後、流通機構の改善がなされ、生産者の栽培技術も向上し、現在では特産品「えらぶユリ」として多くの人々に愛されています。

4月中旬から5月上旬の時期に和泊町 笠石海浜公園を訪れると、美しいユリの花畑を目にすることができます。その純白の花と高貴な香りには、ユリを育て、大切に守り続けてきた先人達の思いが息づいています。

参考文献：「和泊町誌」
鈴木一郎著「日本ユリ根貿易の歴史」
資料提供：和泊町歴史民俗資料館）

市来崎 甚兵衛
資料：和泊町誌より抜粋

アイザック・バンティング
資料提供：和泊町 歴史民俗資料館



アイザック・バンティング 晩年の肖像
資料提供：和泊町 歴史民俗資料館

えらぶユリ年表

明治３２年（1899）	市来崎甚兵衛、ユリ栽培を始める
明治３４年（1901）	和・玉城・喜美留を中心にユリ栽培が広まりだす
明治３５年（1902）	アイザック・バンティングと市来崎、ユリ取引を開始
明治３７年（1904）	バンティング来島し市来崎へ技術指導を始める
大正　３年（1914）	日本ユリ需要増大にともない、農商務省は法整備とともに植物検疫所を新設。島でも品質管理が厳重化する ユリの競争買取で価格高騰、島はユリ景気でにぎわう
大正　７年（1918）	第一次世界大戦のため欧米は輸出禁止となる 小規模なユリの生産組合が出来始める
大正　８年（1919）	前年１１月の大戦終結にともない、欧米各国がユリの輸入を再開
昭和　２年（1927）	県よりユリの病害虫防除の指導始まる
昭和　４年（1929）	和泊町、知名村のユリ生産者により沖永良部百合同業組合設立
昭和　７年（1931）	輸出商による日本百合根輸出組合設立
昭和１６年（1941）	太平洋戦争勃発、凍結令で滞貨となった２５００万球のユリ根を粉にし、代用コーヒー、でん粉が作られる 戦時下、ユリ栽培はスパイ行為などとされ弾圧される
昭和２１年（1946）	終戦後、奄美群島は日本本土から行政分離、米軍政下におかれる ユリの栽培が再開される
昭和２４年（1949）	ユリの取引が再開される 永良部ゆり根出荷組合設立
昭和２８年（1953）	奄美群島が日本へ復帰する
昭和５５年（1980）	和泊町花に「てっぽうゆり」指定

バンティングの曾姪孫プルー・ジェイムスさん。カナダ・バンクーバーの、バンティングの墓にて。バンティング家の研究者でもあるジェイムスさんは、平成22年3月に沖永良部島へ来島し、地元の研究者らと交流しました。

資料提供：和泊町 歴史民俗資料館

ユリについて

純白のユリの花は、キリスト教では聖母マリアの象徴。女性の純潔、母性、慈愛を表す花とされています。

ユリの咲く公園 笠石海浜公園

和泊町の笠石海浜公園には観賞用のユリ畑があり、４月中旬～５月上旬の時期に見ることができます。また、ゆりの開花時期に合わせ、笠石海浜公園では毎年「ゆりフェスタ」のイベントが開催され、様々な芸能や特産品販売、絵画コンクールなどが行われます。

和泊町　笠石海浜公園
和泊町喜美留５４５－１

島の歴史にふれる

和泊町の歴史民俗資料館では、えらぶユリ栽培の歴史に関する資料のほか、沖永良部島の様々な民具資料を観覧することができます。

和泊町　歴史民俗資料館
午前９時～午後５時
水曜・祝日休館
大島郡和泊町根折１３１３－１
電話０９９７－９２－０９１１